

農業利水
偉人伝

5

南 一郎平

水路づくりに生涯を捧げた疎水事業の父

南一郎平の「座右の銘」

「一日学」 今日一日だけはと努力し続けると、一生つづけて学ぶことが出来ること。

「自疆不息」 休み無く努力し、自己を強化すること。



1836年(天保7年)～1919年(大正8年)
没年83歳



広瀬井手

南一郎平の人となり—

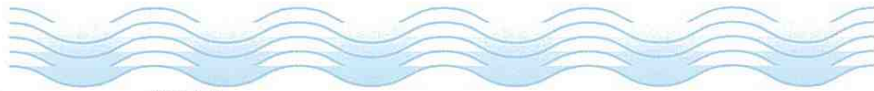
一郎平の住んでいた所は、川より20メートル以上高い台地で、畑地としてしか利用されませんでした。

「米を作り地域を豊かにするように」との父の遺言から、米を作るにはまず水を引くこと、水利事業に取り組むことになりました。

土木工事には素人だった一郎平ですが、熱心に取り組み、これまで誰も不可能だった広瀬井手を完成させました。座右の言葉「一日学」と、毎日今日一日だけはと努力して、それを「自疆不息」と、たゆまずに努力した一生でした。

広瀬井手完成以後は、安積、那須、琵琶湖と明治の三大疎水といわれる工事にに関わり、疎水事業の父と言ってもよい活躍をしています。のちに広瀬井手完成を感謝した地元の人々からのお米の提供を断るなど、人々を豊かにすることに生涯を捧げた人でした。

年号	元号	年齢	生涯業績
一八三六年	天保七年	0	宇佐市金屋にて生まれる
一八五二年	嘉永五年	16	賀来志津と結婚(賀来惟熊の長女)
一八五六年	安政三年	20	父死去(広瀬井手工事再興と完成を「一郎平に遺言」)
一八六一年	文久元年	25	広瀬井手工事再興を決意し、同志にはかる(第四回目の起業)
一八六二年	文久二年	26	着手することなく断念
一八六四年	元治元年	28	広瀬久兵衛資金援助懇願
一八六五年	慶応元年	29	広瀬井手第五回目の起業
一八六六年	慶応二年	30	「井手切手」発行を請願 「井手切手」の両替困難により、公金借用
一八六八年	慶応四年	32	公金の返済が出来ず入牢するも御許騒動で助かる
一八六九年	明治二年	33	松方正義日田県知事、水路の巡察を行なう 国による直営工事の許可が下りる
一八七〇年	明治三年	34	通水式が行なわれ、国からの援助が終了。残工事一切は「一郎平の単独事業となる」
一八七三年	明治六年	37	広瀬井手完工
一八七四年	明治七年	38	松方正義侯の招きにより上京、内務省農務課に勤務する
一八七五年	明治八年	39	全国に水利開墾事業を興すため適地調査に各地へ派遣される
一八七八年	明治二年	42	安積疎水工事着工準備担当として現地で指揮する
一八八一年	明治四年	45	北垣国道京都府知事より、琵琶湖疎水計画の現地調査を依頼される
一八八二年	明治五年	46	琵琶湖疎水の詳細な「意見書」並びに「水利日論見書」を提出
一八八三年	明治六年	47	那須疎水開削のため測量実施
一八八六年	明治九年	50	退官し「現業社」を興す
一八九九年	明治三三年	63	「一郎平を「尚」と改名
一九一九年	大正八年	83	没(五月五日)



ひろ せ い で 広瀬井手

1751年(宝暦元年)～1873年(明治6年) 一郎平 産まれる85年前～37歳

広瀬井手は、宇佐市院内町広瀬の取水口からはじまります。

総延長17キロ。谷を越え、山をうがち、数多くの難所を経て流れています。四度の工事中断の末、明治6年に約120年という歳月をかけて完成しました。

この水路の完成により、水不足で粟や稗などしかできなかった痩せた駅館川東岸の台地は肥沃な水田地帯に変わったのです。

広瀬井手は今でもほぼ同じ所を流れ、稲作に必要な水を供給し続けています。これから先も同じように、多くの水田を潤す水路であり続けることでしょう。

*井手…河川から田んぼに水を引くための水路



1 取水口
津房川東岸につくられた取水口です
(宇佐市院内町広瀬)



2 水路(宅畑)
宇佐市長洲まで総延長17km
高低差約40mです



3 藤ヶ谷水路橋
石工・児島組の技術が活かされています



4 隧道(間畑)
足場の悪い藤ヶ谷を迂回するためにつくられたトンネルです



5 藤ヶ谷の隧道の内部
トンネル内部には鑿の跡が残っています





6 百重岩

岩盤が固く、難所だったところです



7 地獄谷

完成当時はサイフォン式で造られていましたが、現在は、国道10号を越える水路橋になっています



8 サイフォン

一度下げた水を水圧を利用してまた上げる方法で流しています
サイフォンの原理を応用しています

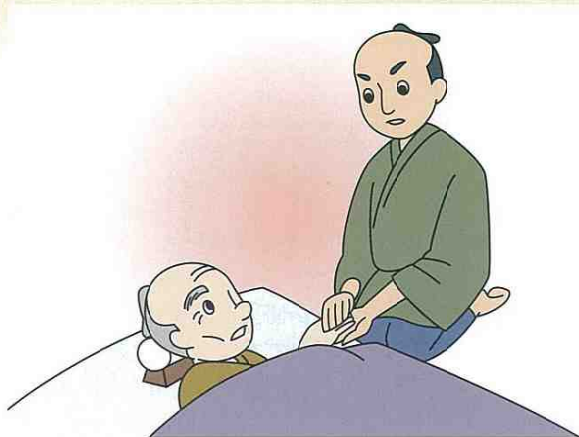


9 南尚神社

昭和35年に建立された神社
120年かかって水路が完成したことを記す碑があります

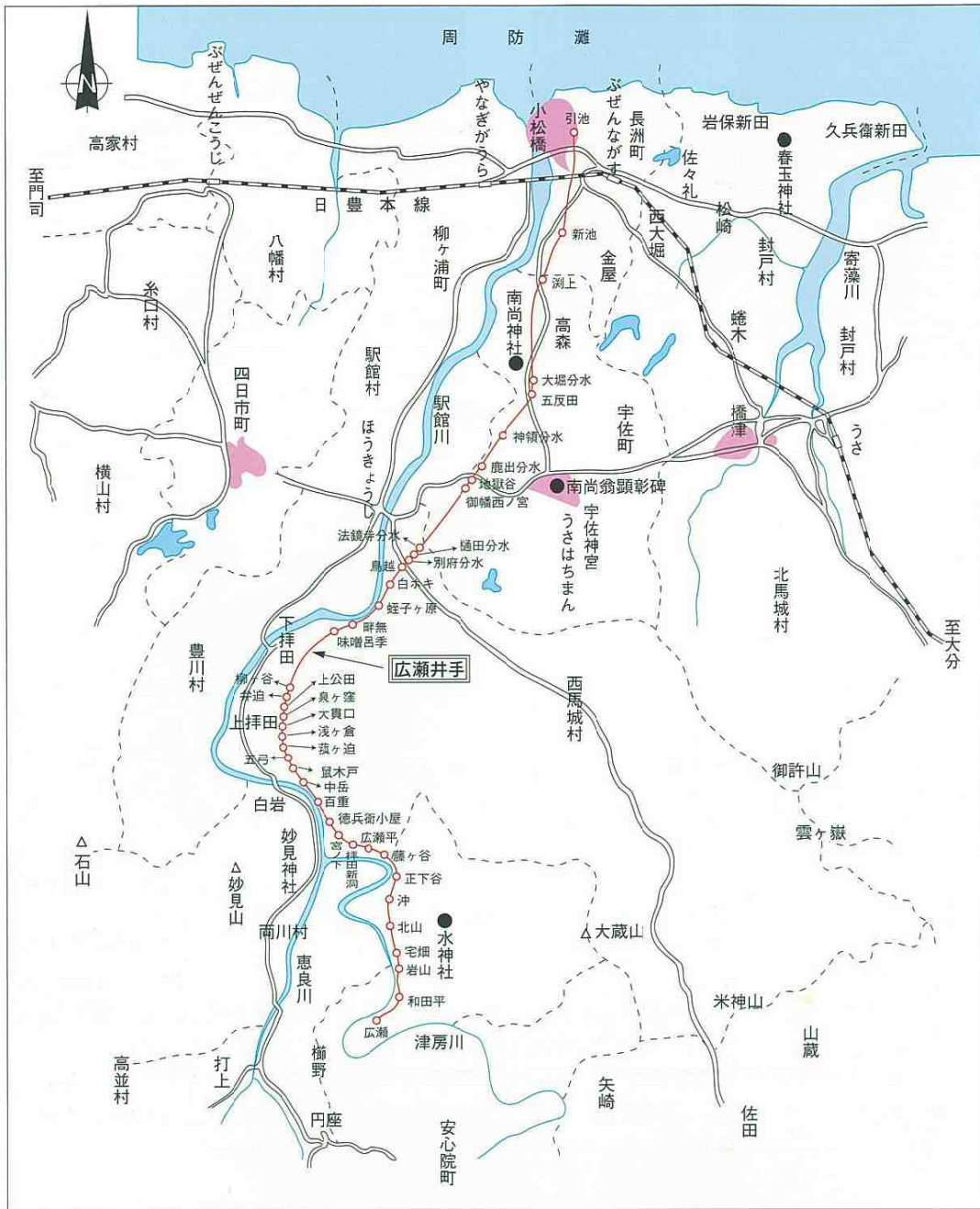
エピソード
I

父の遺言で事業に着手



金屋村の庄屋であった父・宗保は、西国筋郡代(日田代官)塩谷大四郎の広瀬井手事業に協力しました。そして、一人息子の一郎平に井手事業の重要性を説いて育てました。
父の死から五年後の文久元年(1861年)、一郎平26歳の時に父の遺言であった工事再開を決意し、村人など多くの人々に協力を依頼しました。みんなは若い青年の信念と情熱にうたれ、協力することを約束しました。この人たちは最後まで自分の利益は考えずに多くの苦難に耐え、一郎平を助けました。

広瀬井手略図



※この略図は『宇佐市史(中巻)』を改変したものです。

エピソード

II

難工事

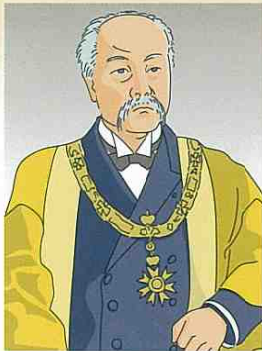
広瀬井手の工事は難所が多くとても苦労をしました。一郎平が工事に着工するまでに過去三度の工事が行なわれましたが、土質が軟質なところは崩落し岩盤は迂回するように樋をかけましたが崩れるなどしたため工事が中断されました。一郎平が着工するようになっても軟質な土質と硬い岩盤に悩まされました。なかでも、非常に硬い岩盤のため一番の難所であった百重岩は新や油で岩盤を熱してひびをいれ、鑿で少しずつ削っていくという工法を使い、縦一尺五寸(45cm)、横一尺二寸(36cm)、長さ五百間(900m)のトンネルを八年もの歳月をかけ完成させました。

総事業費と借金

広瀬井手の総事業費は三万六千両とされています。これを現在のお金に換算すると九億円以上になります。この事業費の多くを日田の豪商・広瀬久兵衛から借用しました。久兵衛からは失敗した時は返さなくても良いという好条件で三千両を借りましたが、難工事のためさらに借金を重ね一万両以上を借りました。一郎平は同時に公金も数千両借りており、全部で二万両になったとされています。一郎平は公金の返済ができずに二度も入牢しています。昭和44年から52年にかけて行なわれた大改修工事では当時の金額で約十二億千五百万円が使われており、このことから広瀬井手の総事業費とそのため一郎平が背負った借金の大きさが伺えます。



松方正義と南一郎平



松方正義

明治2年、広瀬久兵衛からのお金などを使い果たした一郎平らは、政府の長崎総監府に広瀬井手工事の助けを求めました。総監府は、松方正義日田県知事に調査させ国の事業としました。

松方は、この調査で一郎平の高い技術力を知り井手完成後、内務省の技師として採用しました。明治9年、政府から安積疎水(福島県)の調査を命じられました。一郎平らの報告により、安積疎水は政府の重要事業となり、松方は指導者として、一郎平は安積疎水の最高技術者としてかわりました。

この事業の成功により一郎平は、那須疎水(栃木県)琵琶湖疎水(京都府)を手がけ「日本三大疎水の父」と呼ばれ、松方は指導者として認められ大蔵大臣、内閣総理大臣として活躍し、近代日本の礎を築きました。

地元に全て託して上京

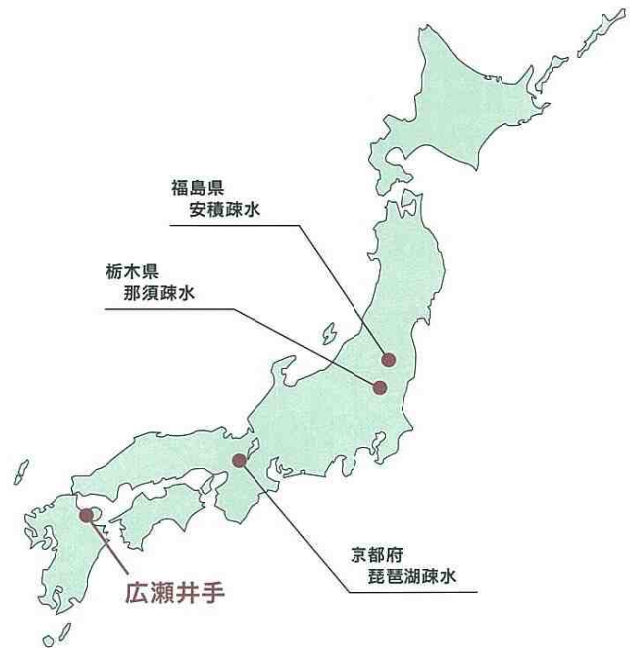
一郎平の人生哲学のひとつに「財を天に積み、業を地に残す」ということばがあります。

明治3年、国の事業となった広瀬井手は出来上がりましたが、時間をかけすぎたために壊れた所も多く補修工事をしなければなりません。国は補修工事にお金を出さなかったため、一郎平は土地や家、日用品まで売り払ってその工事を行ないました。完成後、一郎平は井手の権利や管理は地元に任せ、妻子を残して東京へ行きました。貧しい暮らしをしていた妻子を見かねた近所の人たちはお金を出し合い、一郎平が東京に呼ぶまで妻と5人の子どもを抱えた一家の生活を助けたのでした。

一郎平と三大疎水

広瀬井手が完成した後、明治8年政府高官となっていた松方正義の招きで上京すると、政府(内務省)の土木部門ではたらくことになりました。そして、安積(福島県)・那須(栃木県)の両疎水事業では政府側技師の指導者として調査から施行まで行ない、琵琶湖疎水(京都府)でも実地踏査と基本設計を示すなど、日本の三大疎水事業に大きな足跡を残しています。

* 疎水(疏水)…農業かんがい・給水・発電などのため、土地を切り開いて作った水路



あさか 安積疎水

安積疎水は、猪苗代湖から取水し、福島県の郡山市などに飲用・かんがい用水を供給している疎水です。明治15年に開通し、それまで水利が悪かった広大な安積原野を一大穀倉地帯に一変させました。約60kmにおよぶ幹線が着工後わずか3年で完成していることから、広瀬井手開削で培った一郎平の技術が、当時いかに優れていたかを知ることができます。一郎平は、政府の命を受け、東北の開墾地調査を行った段階から安積と関わり、以後、測量、設計、工事監督に直接従事しました。完成後も疎水掛長として現地にとどまり、現在までの安積疎水の基礎を作り上げました。



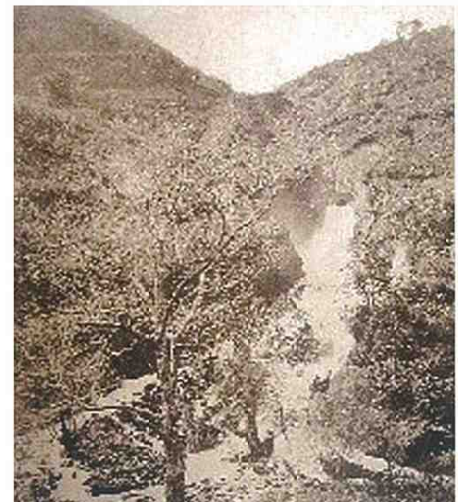
安積疎水取水口 (提供: 安積疏水土地改良区)



安積疎水・十六門橋 (提供: 安積疏水土地改良区)



晩秋の磐梯山と猪苗代湖 (提供: (社)猪苗代湖観光協会)



明治14年に貫通した隧道 (提供: 安積疏水土地改良区)

那須疎水



明治18年に最初につくられた那須疎水取水口
(提供：那須野が原博物館)



水の無い蛇尾川 (提供：水土里ネット那須野ヶ原)

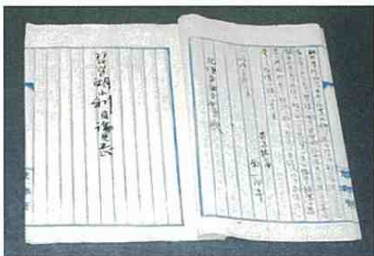
那須疎水は、栃木県の那須野ヶ原に明治18年に開削されました。当時の那須野ヶ原は、4万ヘクタールにもおよぶ平野でありながら、保水性が極めて悪い扇状地であったため、山からの水がふもとで吸い込まれ平野の中央を流れる蛇尾川はふだんから水はほとんど流れていない状態だったため、かんがい用水どころか飲用水にも事欠く状態でした。そこで、内務省は、広瀬井手を手がけた一郎平らを起用し、国営事業として開削に取り組むことにしました。

一郎平は、総監督として、指揮にあたり、約16kmにおよぶ本幹水路をわずか5ヶ月で完成させ、那須野ヶ原の今日の発展の基礎を築きました。那須疎水の蛇尾川サイホン、めがね橋、隧道などには、一郎平が広瀬井手の開削で培った技術や工法が活かされています。



那須疎水 (提供：水土里ネット那須野ヶ原)

琵琶湖疎水



「琵琶湖水利意見書」及び「水利目論見表」
(琵琶湖疎水記念館蔵)

琵琶湖疎水は、明治維新による東京遷都により、衰退していく京都の産業振興を図ろうと計画された事業でした。一郎平は、京都府の依頼により明治15年に現地に赴いて、琵琶湖からどのように水を引いたら良いか、実際に通水を始めると琵琶湖の水位がどの位下がるかなどを調査して、「琵琶湖水利意見書」「水利目論見表」にまとめました。

この調査をもとに工事が始まったのです。工事には宇佐からも職人さんが加わっていたことが、事故でなくなった人の名簿で知ることができます。

京都南禅寺の前にある琵琶湖疎水記念館には、「琵琶湖水利意見書」などが展示され、ビデオでも一郎平の業績紹介を見ることができま



琵琶湖疎水 (提供：京都市上下水道局)



琵琶湖疎水 (提供：京都市上下水道局)



琵琶湖疎水記念館 (提供：京都市上下水道局)

三大疎水以後の南一郎平

げん ぎょう しゃ 現業社

十和田と南一郎平

青森県十和田市は、安政26年（1859年）に新渡戸稲造の祖父・傳、父・十次郎、兄・七郎によって、奥入瀬溪流から水を引いて開かれました。明治19年（1886年）に内務省を退官した一郎平は、新渡戸七郎らと共に「現業社」を興し、箱根、横須賀、信越、岩手、青森などで鉄道敷設工事などに携わりました。



新渡戸七郎
(提供：十和田市立新渡戸記念館)

なん しょう 南尚神社と顕彰碑

宇佐市高森にある大分県立歴史博物館の東にある小さな神社が南一郎平(のちに「尚」に改名)が祭られている南尚神社です。

石造りの社の碑文には、元号と西暦が並んで刻まれています。神社に西暦を刻むことは長老たちの激しい抵抗があったと言われてしています。しかし、「宝暦元年起工、明治三年通水式」だけでは何年かかって完成したのかわかりません。そこで、「宝暦元年(1751)起工スルモ三回挫折 元治元年(1864)南翁奮起ノ末明治三年(1870)五月通水式ヲ行ナウニ至ル」と120年余の辛苦により水路が出来たことが細かく記されています。

広瀬井手完成後、水利組合は南一郎平に毎年精米一俵と30円を送ろうとしましたが一郎平は「村人が豊かになって礼節を知ればいい」といって受け取らなかったといいます。

そこで感謝の気持ちを表し、大正十二年六月一郎平の銅像を宇佐神宮神苑の隣接地に建て遺徳を偲ぶことにしました。その後神苑拡張のため銅像を移転することとなりましたが第二次世界大戦中に消滅してしまいました。

この銅像の礎石は南尚神社内の「改良竣工記念碑」の礎石となり残っています。その後広瀬井手水利組合に関係する人々の寄付により、昭和二十八年九月二十三日宇佐神宮大鳥居前に顕彰碑を建立し現在に至っています。



顕彰碑



改良竣工記念碑

